

幸せのパゴダ

初通し台本

岩田達宗

【第1場】パゴダのモノローグ

パゴダと全員　パゴダと人は僕（彼）を呼ぶ
古いお寺のお堂の中から　この街を
何十年も眺めてきた
人の暮らしの嘆き哀しみ、おそれ、よろこび、
いのちの営み
そのたび人は僕に祈る
けれども僕は　此処から町を眺めるだけ

パゴダと人は僕（彼）を呼ぶ
遠い昔の戦のときに　この街を
離れて戦ってきた
南の国の泥の中で、這いずり回り、
命を落とした
その時僕は　神に祈り
今では僕は　此処から町を眺めている

パゴダと人は僕（彼）を呼ぶ
あるときひどい大雨で　この街は
洪水に襲われた
泥が呑み込む　家も、道路も、古いお寺の
お堂まで
その時僕も　泥にのまれ
今では何も　此処から何も見えなくなった

今こそ僕は神に祈る
遠い戦の南の国で　以前も泥に飲み込まれた
泥の中で敵と戦い、泥の中で命を落とした
今また僕は泥の中に閉じ込められた
今また僕は神に祈る
この泥の中で

【第2場】お寺の本堂　劇団の稽古場

皆、洪水の後。作業着で集まっている。
ケーリは水を皆に配ったり、気を遣っている

座長　みんな来たな？

全員　(疲れている、返事はまばら)

座長　こうして集まったのは洪水の起きた日以来
だけれど
みんな無事で本当に良かった。
それぞれ大変だったろうな、本当にお疲れ
様でした

ポチ　能書きはいいから手短かにやってくれ！

ケーリ　そうです、みんな無理して集まってるん
ですから… (プリマにペットボトルを渡しな
がら)

プリマ　…なによ、これ、炭酸が入ってないわ！

ケーリ　こんな時に無茶言わないでください！

プリマ　それを何とかするのがマネージャーの仕事
でしょう！要らないわ、こんなもの！（放

り捨てる)

プリモ　(目で我慢しろ、と合図してケーリからペッ
トボトルを受け取る) あらあ、美味しいわ
あ、お水。どうも有り難う、ケーリちゃん。

ポチ　おい、早くしてくれよ！　忙しいし、それ
に疲れてんだ…

プリマ　(苛立つポチを制する様に) 貴方のところ
は特に大変だったわね…、さっき、聞いた
わ…

ポチ　(プリマに) どうも…、(座長に) とにかく
早いトコ、話済ましてくれよ。

プリモ　まあまあ、今度の定期公演をどうするか、
でしょ？

座長　そうだ、
本番まであと1週間。でも洪水が来てから
今日まで全く稽古はできなかった。劇場は
電気も通らないし、客席も泥で埋まったま
ま。当然、復旧のめども立たない。挙句に
作曲家は最後の場面がまだ書けないそう
だ。

全員　えー！

ポチ　またかよ。

プリモ　これでもう3回目ね…スランプだなんて言
い訳にもならないわ。

ケーリ　台本と、曲があって初めて舞台が成立する
わけですからね。アナタがきちんと曲を書
いてくれないとあたし達は何もできないん
ですよ。

作曲家　すいません…努力したんですが…やっぱ
り…

座長　それと大事な知らせが一つ。長年、慣れ親
しんだ俺達の稽古場であるこの寺のことだ
が…トイレの裏の土砂崩れがひどかったか
らな…損害がひどい。それにもともとここ
は住職の居ない廃寺だった訳で…それで市
役所からの通達だ。今日から三日後に取り
壊しが決まった。

プリモ　そう…、覚悟してたけど、あたし達は稽古
場を失うわけね。

座長　ああ、少なくとも三日後にはね。

しばし、沈黙が流れる

ポチ　(唐突に大きな声で、わざと明るく) オッ
ケー！じゃあ、今回の定演は、中止ね。

ケーリ　残念ですが、でも劇団の経理担当として言
わせていただければ当然です。今回の洪水
で流された衣裳や小道具、大道具を補填す

る予算はありませんから。挙句の果てに曲が未完成じゃ…

作曲家 すいません…

プリモ あたしの歌が聴けないのか…お客様は本当に残念ねえ

プリマ (鼻で笑う) 暗譜が間に合わなくてホッとしてるんでしょ?

プリモ アラ、失礼しちゃうわ。

ケーリ (挑戦的にプリマに向かって) この劇団の代表として、貴女は? 中止で良いんですか?

プリマ (暫く、皆の顔を見て) 結構よ、公演はやめましょう

ポチ ハイ、じゃあこれで解散! 良かったなあ、作曲家、首の皮一枚つながったなあ、洪水様様って訳だ!

ヒバリ ちょっと待ってください!

ポチ なんだよ?

ヒバリ いえ、その、結論が早すぎるというか…、あたしはもう少し…

ポチ なんだよ、ヒバリ、お前、新人のくせに意見するつもりか?

ヒバリ でも、折角あそこまで稽古したんだし、もう少し…

ポチ できるわけないだろ!

プリモ というか…、ちょっと公演をしようなんて気にはならないわねえ

ケーリ お客様だって来ると思うの? 誰も来ないわよ。それ以前に衣裳も小道具も、セットも、ほとんど流されちゃったのよ。公演は不可能よ、現実的に不可能、議論にならないわ。

ポチ 判ったか、バカ!

座長 馬鹿とはなんだポチ! みんなも、ちょっと待ってられないか。俺は実はヒバリと同じ意見なんだ。

全員 エエーッ!

ケーリ ばかばかしい!

座長 だから馬鹿馬鹿言うな、勿論、公演を執行するというのは無茶だ。そんなことは言っていない。

ポチ じゃあ、なんだよ?

座長 つまりだ、この寺が取り壊しになるまでに三日間ある。もう一度、三日だけ稽古しないか?

ポチ バカいわないでくれよ!

座長 だから馬鹿馬鹿言うな!

ケーリ 何もない、劇場すらないのにどうやって公演をやるんですか?

座長 だから公演をやるうとは言っていない、稽古だよ、稽古だけ

プリマ どういうこと?

座長 俺達は長年、此处で稽古して舞台を創ってきた。俺達の先輩達も。その稽古場があと三日でなくなるんだ。なあ、最後の三日間、稽古しようや。この寺の殆どは壊れちゃったが、この大広間だけは無事とは言わないが何とか使える。な、三日間だけ、最後の稽古しようじゃないか

ケーリ 公演がないのに稽古するんですか!

座長 それは…三日間稽古して、本番もできたらそれに越したことはない俺は思うけど…

ケーリ 公演は不可能です!

座長 判った…じゃあ、せめて稽古だけ

ケーリ 本番もないのに稽古をするなんて馬鹿げます!

座長 いや、たったの三日、稽古をやるうと言ってるだけじゃないか!

ポチ たったの三日、と軽々しく言うな!

座長 ポチ…

ポチ 俺ちなんか復旧の目処もついてねエンだぞ、役所の手続きだの、保険のことだの、猫の手も借りたい有様なんだ!! こんな時に稽古なんかヘラヘラやられてられるか!

座長 ヘラヘラとはなんだ! この野郎!

ポチ てめえが馬鹿なこと言うからだろうが!

座長 馬鹿馬鹿言うなって言ってるだろう! (二人、つかみ合いに…)

ヒバリ や、やめてください…!

ケーリ やめなさいよ!

喧嘩が始まる

プリモ (一喝する) やめなさい!

テノールのプリモは普段は怪しいオカマだが、極めるときは決める頼りになる奴である。喧嘩は収まる。沈黙

プリモ 困ったわねえ…、座長の言うことは判らないではないけど…

ケーリ なに言うんですか…

プリモ (プリマに向かって) この劇団の代表は貴女よ。貴女はどう思うの?

プリマ いいんじゃない。

一同 エ？

プリマ やりましょう。三日間だけ。但し、有志のみ、自由参加。強制はなし。

ケーリ でも…

プリマ 稽古をするだけ、本番のことは何も言っていないわ。

ポチ 俺、帰るわ。(去る)

ケーリ 馬鹿げてます。現実的じゃありません。(憤然として立つ)

座長 (小声で) 馬鹿馬鹿言うな、バカ！

ケーリ (プリマに向かって) 本番がなくなって一番ホッとしてるのは作曲家じゃなくて、貴女かと思いましたけど…主役がその声で歌えないんじゃないか…。恥をかかなくて済むでしょうにね。(去る)

プリモ マ、明日がどうなるか楽しみね…。(座長に) ポチのことは許して、だって、判るでしょ、いまだにお葬式すら出せないで居るのよ…。(皆に) じゃあね、お疲れ様あー (発声練習をしながら去る)

座長 (プリマに) すいません…余計なことを言っちゃいましたか？

プリマ お気遣いは無用です。(去る)

作曲家 ああ…すいません、僕は…！多分、もし公演をやるんだとしても…やっぱり…

座長 いいよ、気にするな。お前は責任感が強すぎて、何でも背負い込みすぎだ。それより、稽古には来てくれよ、ピアノを頼むよ。

作曲家 稽古には参加します。曲ができなくて…せめてお詫びに…すいません。…曲の方も、頑張ってみます… (去る)

座長とヒバリが取り残される

ヒバリ あの…有り難うございます！

座長 別に、お前にお礼を言われることじゃないさ…。でも…明日は誰も来ないかなあ

ヒバリ そうでしょうか？

座長 さ、お前も帰れ

ヒバリ もし、明日から稽古するんならあたし便所掃除してきます。便所を使えるようにしておかないと。

座長 そうか、でもあそこが一番ひどく土砂が流されてきたところだからな。大変だぞ。マ、気をつけてな。

【第3場】便所

ヒバリがひとり。

ヒバリ 父さんは町から出て行っちゃったアタシがうちに生まれてきたから母さんはあたしを叩き続けたアタシがうちに生まれてきたからクラスはアタシを生贄にしていたそれで皆が安全になるのだから先生にはアタシは透明だったそれで問題はなくなるのだからお家ってなに？ 学校ってなに？ 友達ってなに？アタシにはただの言葉で むなし記号砂を無理矢理に噛まされるようなただの辛い罰ゲーム

この稽古場が やっと見つけたアタシの居場所アタシが歌を 思いのたけを唄える居場所今は掃除のトイレの中でもいつか舞台の上で唄うの

アタシには此処だけアタシには歌だけ

ヒバリがベソをかき始めるとバゴダが現れる。

ヒバリ ギャーッ!!!

バゴダ ワーッ!!!

ヒバリ お化け！ 出た！ 出た！ (腰が抜けている)

バゴダ え？…待って、待って！ き、君は僕の姿が、みつ、見えるの？

ヒバリ お化け、来ないで、誰か…誰か…

バゴダ そうか…待って、大丈夫！ 大丈夫だから、君はヒバリだろ？

ヒバリ エ!? なんて知ってるの？

バゴダ それは…その…君達の劇団のファンなんだ！

ヒバリ キャー！ 近付かないで！ お化け！

バゴダ お化けじゃないって！ いや…、そうかもしれないけど…でもほら！(と、足を叩く) おお、足がある！足があるよ！お化けじゃない！人間だ！ 僕は、人間だ！

ヒバリ アンタ、誰？

バゴダ バゴダと人は、僕を呼ぶ！

ヒバリ 変な名前！

バゴダ ヒバリってのも変な名前だよ！

ヒバリ アタシのはあだ名！

バゴダ じゃあ、本名は？

ヒバリ 教えない、

パゴダ なんで？

ヒバリ 嫌いだから、お父さんのつけた名前だから。

パゴダ …ごめん、悪かった、訊いた僕が悪かった

ヒバリ いいの、だからヒバリは自分でつけた

パゴダ どうして、ヒバリ？

ヒバリ アタシの夢だから。誰よりも天高く飛び、誰よりもきれいな声で歌う、それがヒバリ。

パゴダ 君の名前は、君の夢？…そうか、夢、夢か！舞台が君の夢なんだ！僕は君たちの舞台のことをよく知ってるよ唄って、踊って、お芝居して、見てて楽しかった、ずっと羨ましかった、君たちが大好きだった君がこの劇団に入るずっと前から此処で君たちの稽古を毎日見てたんだよ！

ヒバリ 毎日！稽古を？そんなに？じゃあ、本番は？

パゴダ それはその、…行けないんだよ…

ヒバリ (パゴダの姿を見て) ああ、お金がないのか…

パゴダ まあね…、そうだ、今日も君たちの話し合うのを見てたよ。

ヒバリ (暗くなって) そう…じゃあ知ってるのね、あたし達の劇団は、ピンチ。今度の公演も中きつと止だし、それだけじゃなくて今度のことがきっかけで皆がギクシャクして、もう劇団は潰れちゃうかも…

パゴダ 君たちは今ピンチなんだ！

ヒバリ 此処はアタシの大切な場所なのに…、

パゴダ そうだ！いや、そういうことか！そういうことか！判ったぞ！

ヒバリ どうしたの？今、僕はこうして君としゃべっている、ってことは、僕の夢は叶った！僕の願いは通じたんだ！神様！

ヒバリ 何を言ってるの？

パゴダ 遠い昔、僕は夢を断たれ、南の国の戦で散った。そして魂は此処へ戻り、この古いお寺のお堂で人々を見つめ続けた。人々は僕に祈り、涙を流し、手を合わせた…でも僕は何十年もただじっとそれを見つめていただけだった。何も出来ず、長い長い年月あと三日、この世を去る前に神様がチャンスくれた僕はこうして、動いて、話ができる

ヒバリ なに言ってるのよ？頭おかしいんじゃないの？

パゴダ 僕なら力になれる！此処につれておいで！

ヒバリ つれて来る？ここに？トイレに？いやよ！何でそんなことしなきゃいけないのよ？力になれるって、なに？一体、誰をつれて来いって言うの？

パゴダ 困っている人を！涙を流している人を、祈っている人を、彼らすべての力になりたいんだ！それが僕の夢だったんだ！君たちの仲間を、君を助けてあげるよ！

ヒバリ (再び気味が悪くなって) し、失礼します！

パゴダ これが僕の夢だったんだ、つれておいで、ヒバリ！待ってる、待ってる…。

【第4場】 1日目 稽古場

翌日 結局全員集まっている。発声練習。プリマは参加しないで座っているだけ。ポチは集中を欠いていて時々間違えたり、注意されているので段々にふてくされて行く。ケーリは稽古に参加しながらも、ペットボトルを配ったり、甲斐甲斐しく働いている。

座長 ポチ！

ポチ ンだよ、うるせえな！

座長 やる気アンのか、ひどすぎるぞ！（座がしらけ、嫌な空気に）じゃあ、もう一度

同じこと。次第にポチは反抗的になり、露骨に皆の邪魔をし始める

ポチ (自分のミスを棚に上げて作曲家に) なにやってんだよ、ピアノ！このヘッタ糞！

作曲家 すいません…

座長 ポチ！

ポチ 曲もろくに書けないんだからせめて、伴奏くらいちゃんとしろ！邪魔してんのか！このポケ！

座長 ポチ、何てこと言うんだ！

ポチ ンだよ、文句アンのか！

座長 当たり前だ！トチッテンのはお前のほうだろ！

ポチ 忙しい中来てやってんだろ！何でそんな言われ方しなきゃいけないんだよ！ふざけんなよ！

座長 お前に来てくれと頼んだ覚えはない！そんなに言うならカエレッ！

ポチ ンだとお！（手を出す、再び、喧嘩が…）

プリモ やめなさい！ふたりとも！

座はしらせ切ってしまう。ケーリは呆れてタバコをすい始める

ポチ (手を引いて) 言われなくても帰るよ！ボケ！やっつけられるか！稽古なんざしてる場合かよ！ ビーチクバーチク、恥ずかしいよ！

プリモ ポチ、いい加減にしなさい…

ポチ その名前で呼ぶな！ くされオカマ！（走り去る）

プリモ マ！ 随分ね！

ヒバリ ポチさん！

座長 ほっとけ！

ヒバリ でも！

プリモ 帰りゃしないわよ、どうせ便所で暫く籠城するだけよ、いつもそうなの。

ヒバリ 便所…？ ああ、そうだ！（と、走り去る）

座長 おい！ほっとけ！

プリモ まあまあ…

ケーリ それより座長…、ポチもどうかと思いますけど、この人は？（プリマをさす。プリマはケーリが配ったペットボトルをいじくっていたところである）全然唄う気もないし、これで良いんですか？ 経理担当のあたしですらこうして稽古に参加してるのに、主役は特別扱いですか？

座長 それは、調子が…

プリマ 帰ります…お邪魔のようだし。（ケーリのそばに行ってタバコを引つつかむ）稽古場にタバコを吸う人が居るなんて信じられないわ。それにアタシは炭酸の入ってないお水はお断り！（去る）

座長 (取り返しにつかない空気に) さあ、今日は解散だ…、明日も稽古場を開けて待ってるから、(三々五々、しらせて皆は去ってゆく。その背中に向かって)待ってるから、待ってるからな

【第5場】ポチの歌 または音痴の歌

ポチ そうさ音痴、音痴、俺は音痴
ドレがドの音？ ソレはレの音？ ミレばソの音！
これじゃワカらん！

小さな頃から歌が好き！
好きな時間は音楽さ
算数なんか大嫌い
体操よりも、給食よりも
歌の時間が待ち遠しい

歌の時間になったなら
大きな声で唄うのさ

カーラース、何故なくのー？ カラスはやーまーにいいー

ヒバリ (学校の先生の振りをして)「こら誰だ！ふざけて歌ってる奴は！ 真面目に唄いなさい！」

ポチ だけど音痴、音痴、ポチは音痴！
ドレがどの音？ ソレはレの音？ 見ればソの音！
俺にや、分からん！

大きな声が俺の自慢
誰にも負けない大きな声
親父ゆずりの大声だ
カケッコよりも、ゲームよりも
大きな声なら一等賞！
唄える場所なら何処でもいい
心に歌が沸いたなら
大きな声で唄うのさ

あしーたあ、はーまあべーえをおー さあ
まーあーよーええばあー

ヒバリ (近所のおばさんの振りで)「あの、気持ちよさそうで悪いんだけど、大きな声は出さないでくれます？ 子供が怖がって泣きますし、犬も咆えるし、近所迷惑ですから。警察呼びますよ、ホンとに！」

ポチ そうだ音痴、音痴、ポチは音痴！
ドレがドの音？ ソレはレの音？ 見ればソの音！
これじゃ分からん！

そしていよいよ学校で
進路を決める大事な日
親父と先生のいる前で
一大決心告げました
まず先生が言いました

ヒバリ (先生を演じて)「ポチ君？君は進学希望？」

ポチ すると親父が言いました

パゴダ (父を演じて)「いやあ、こいつは馬鹿ですから、家の酒屋を継がせますわ」

ポチ そこで俺はこういった
「いや、僕は進学する。自分の一番好きな道に進みます」

ヒバリ・パゴダ (先生と父親で)「どういうこと？」

ポチ 「僕が誰にも負けないのは この大声と美声だけ
音大に行って、オペラ歌手になります」
すると先生が笑ってこういった。

ヒバリ 「ポチ君、夢を見るのはいいことね、でも無理。アナタ音痴だもん」

ポチ だから音痴！音痴！ポチは音痴！
ドレがドの音？ ソレはレの音？ 見ればソの音
これじゃ分からん！
音楽大学、門前払い

合唱団もお払い箱
カラオケだって、誘われない！
だけどやっぱり歌が好き
ある日、見つけた求人広告
この劇団の募集の公募

ヒバリ 「求む！大きな声で唄える方、歌が誰よりも好きな方！」

ポチ やった！ これだ！ 唄える場所を見つけたぞ！

ヒバリ 「但し！」

ポチ …但し…？

ヒバリ バク転ができること！

ポチ それから毎日練習だ！
来る日も来る日も、バク転だ！
そしてようやく、遂にある日！

ヒバリ・バゴダ できた！

ポチ、見事なバク転

ポチ・ヒバリ・バゴダ (三重唱) そうさ、音痴、音痴、ポチは音痴！
だけど今ではこの劇団で
大きな声で唄うのさ！
だってポチこそこの世で一人！
バク転しながら唄う歌手！
他では見れない
バクテン・テノール、ここにあり！

進め！ 音痴、音痴、ポチは音痴！
ドレがドの音？ ソレはレの音？ 見れば
ソの音
これじゃ分かん！

【第6場】 2日目 稽古場

ケーリ 待ってもムダ！もう来ませんよ！

ポチとプリマドンナの姿はない 他の連中は集まっている。プリマに渡せないペットボトルをもてあそんでいるケーリはかなりイラついている。

ケーリ (炭酸入りのペットボトルをもてあそびながら) 主役まで来ないわけだし、今度こそ公演が不可能になったのは、ハッキリしたわ。公演は中止、これでいいわね。

座長 イヤ、三日間は稽古をしようと約束したる！

プリモ この面子じゃ稽古にもならないのよ…

座長 だめか？

ケーリ 無駄です！

座長 おい、作曲家、お前はどうか？

作曲家 止めましょう…その方が僕も助かる…僕に

はこれ以上、ムリですし

座長 なに、弱気なこと言ってんだよ、どうしちゃったんだ、え？ 何でそんななんだ、お前ら！ 第一、お前らはこうして来たわけだろ？ 本当はやりたいんじゃないのか？ グダグダ文句や泣きごとと言う位ならなんで今日、此処に来た？ そんな事のためにわざわざ来たわけじゃないだろう？

ケーリ お言葉を返すようですが…、私がここに来たのは経理担当者としての義務を果たすためです。座長のなんだか訳のわからないセンチメンタリズムとは関係ありません。

座長 センチメンタルとはなんだ！

ケーリ これがセンチメンタルじゃなくてなんですか！

座長 なんだと！

ケーリ 貴方のやることはいつも、そう！ リーダーとしての資質を疑うわ！ 貴方のようなおセンチな精神主義では組織は成り立ちません！

座長 俺のどこがセンチな精神主義者だってんだ！

ケーリ 作曲が間に合わないのはこれで3回目よ！ どうしていつまでも彼でやるの？ 何故、別の作曲家でやらないの!?

座長 だって…こいつは仲間じゃないか。

作曲家 …すみません

ケーリ それをセンチメンタルと言うんです！ 仲間がどうこう以前に、お客様に作品を届ける責任を果たさなければリーダーとは言えません！ 彼は現に曲がかけないのよ！ お客様への責任を果たせないのよ！ どうして彼に固執するの?!…それに、あの女のことはどうよ！いつまであの女を主役にしてるつもり？ 判ってるんでしょ？ もう唄えないのよ！ 声が出ないのよ！

プリモ そうねえ…、このけいこが始まってから一度もちゃんとフルヴォイスで通したことはないわねえ…。いよいよ、限界かしらねえ…。

ケーリ 何を今さら。そんな事2年も3年も前からとっくに判っていたでしょうに！ 確かにこの劇団は彼女の劇団よ！ 彼女はこの劇団の功労者よ！ でも、唄えないのよ！ どうして切らないの！

座長 それは…

ケーリ できないんでしょ！ ほら、それがおセンチじゃなくてなんだって言うの？ 座長がこれじゃね…マ、いいわ、どうせ公演はムリ。作曲家は曲が書けない、プリマは唄えない…公演が中止になって本当によかったわ、

ヒバリ あの…

プリマがいつの間にか現れて今の話を聞いていたらしい。ケーリは気まずそうにプリマに渡すはずのボトルを隠して

ケーリ 何か、仰りたいことでも…？

プリマ いいえ…

気まずい、重い沈黙。その沈黙がケーリの言ったことが事実であると皆が受け止めていることを物語る。空気を察し、プリマドonnaは何も言わず、踵を返す。ヒバリだけが何かを思い出したように、プリマドonnaの後を追う

ケーリ (ベットのボトルを投げつけて) なによ！
それでも主役なの！ それでもプリマドonnaなの！意気地なし！卑怯者！

【第7場】便所の脇 2日目

ヒバリ (追いついて) あの…！

プリマ なに？

ヒバリ あの…、あの…

プリマ 用がないなら帰るわよ、お退きなさい。

ヒバリ その…その…

プリマ じゃあね (去ろうとする)

ヒバリ トイレに行きましょう！

プリマ はあ？

ヒバリ あたしと一緒にトイレに行きましょう！

プリマ なに言ってるの？

ヒバリ 男子便所！ お願いします！ あたしと一緒に！ トイレ！

プリマ 頭おかしいんじゃないの？ アタシはそんな趣味ありません！

ヒバリ いえ、その、トイレに行けば、きっと！

プリマ 人を呼ぶわよ！どきなさい！

その時、便所の中から歌が聞こえる。とても場違いな間抜けだが、哀愁を帯びた、童謡。

パゴダ (便所の中から唄う)

プリマ あれはなに？

ヒバリ あれは！

プリマは吸い寄せられるように便所の扉へ。すると、扉の隙間からパゴダの右手が出てくる。
ポチのときと同じように辺りの空気が変わる

プリマ そのうたは…

ヒバリ あ、それは、あたしもよく知ってます！

プリマもヒバリもパゴダに合わせて唄いだす。きれいなハーモニーになる。唄い終わって

プリマ 貴方、誰？

パゴダ さあ

プリマ どうしてその歌を？

パゴダ 僕が作ったから!!!

プリマ うそ!?

パゴダ ウソ。

プリマ なんだ…、でも知ってるのね、あたしのこと、その歌を…

パゴダ しってる

プリマ 何十年も前のことよ。

パゴダ 忘れないよ。

思い出の曲。記念すべき君の第一歩。
始めてもらった歌の仕事！
ラジオのスポットの歌のお姉さん
名前のクレジットもない、ギャラもたったの三千円…

ヒバリ ええっ！ そうなんですか？

プリマ 昔、昔、遠い昔…
私も若く、仲間も大勢、居た
遠い遠い、昔の話。
沢山の仲間が、ともに音楽を目指し、未来を信じた
でもみな、辞めていった 一人減り、二人減り、
それは敗北と思った 私はやめないと誓った
邪魔するものは敵と思った そのためなら
全てを諦めた
そして…そして…
私はやめなかった、唄い続けた

それが私の劇団、私が創った 私の劇団
私が育て 私が守った
私が唄い続けるための 私の場所

でも私は衰えた 昔のように唄えない
築き上げた財産も劇場も
たった一度の洪水で 跡形もなく奪われた

これが私の人生、私が生きた 私の人生
私が選び 私が捨てた
泥と瓦礫があとに残された 私の場所

ケーリが居る。彼女も後を追ってきたのだ

ケーリ アタシだって
アンタと一緒にこの劇団を作り 守ってきた

アンタが歌を唄うために それだけのために
でも 本当は…
アンタなんか大嫌いよ

アンタのために努力した。
アタシも最初は唄いたかった
アンタみたいになりたかった
でも、神様が選んだのはアンタ
観客が選んだのはアンタ
アタシが認めたのはアンタ
アタシは全て諦めた 全て捨ててきた
アンタの歌を認めたから

アンタがこのまま朽ち果てるなら
アンタの歌がこれまでなら
アタシの役目も、もう此処まで。
いい気味ね、これでお別れ
アンタなんか大嫌いよ (徐々に興奮してくる)
洪水でいっそ死ねばよかったのに！
なんで生きてるのよ！ 死んじマエ！ シ
ネッ！
自分ひとりで生きてきたと思ってるなら
そんな命なら 安いものよ
とっとと死んじまえ！

(去り際に捨て台詞) アタシは自分で次の
人生を見つけます
お世話になりました さようなら

ケーリは去る

ヒバリ あ…行っちゃいますよ… (パゴダに) ねえ、何とかしてよ！
助けてくれるんでしょう!? (プリマに)
良いんですか？ このままこれでお終いですか？

沈黙が流れる ヒバリは絶望して腰を落とす。そこへプリマが姿を現す

プリモ ねえ、もしよかったら、ですけど…稽古再開しません？

一同 !!??

プリモ 帰ってきたのよ、ポチが。あの子はねえ…すぐ犬みたいにキャンキャン咆えて、やたら人に噛み付くくせに、帰巢本能は本当に発達しててすぐに帰ってきちゃうのよ…。もう、本当に犬そのもの。呆れちゃうわねえ…さて、どうなさいますか？ 主役のご機嫌が麗しければ、折角だから稽古しません？ それともやっぱりお帰りになる？

プリマ 気が変わったわ やりましょう

プリモ 座長は、通す、って言ってますよ…。

プリマ 望むところよ。(去る)

プリモ アー。こりゃいけるかも…

ヒバリ え？だって、あんなに怒ってますよ。ケーリさんにひどい事言われて…。

プリモ だからいいのよ。ムキになって。ありゃ唄うわよ。女の…いえ、プリマドンナの意地ね。

ヒバリ 本当ですか！ じゃあ！…じゃあ！

プリモ さ、貴女もいらっしゃい。(チラリとトイレを気にして) ね、そこに誰か居るの…？

ヒバリ いえ、あの…別に。

プリモ そ。じゃあね、早くいらっしゃい。(去る)

ヒバリ (トイレに駆け寄って) パゴダ！

パゴダ どうだ？

ヒバリ うん！どうなるかって思ったけど…、稽古しようって！

パゴダ よかった…

ヒバリ どうして？ 本当に魔法じゃないの？

パゴダ 違うよ、こっちだってドキドキなんだから…。上手くいかなかったらどうしようかって…

ヒバリ でもどうして？ プリマドンナもポチさんもパゴダにはとっても素直になって…？色々なことを話して。どうして？ パゴダのその不思議な力はなに？

パゴダ だから、そんなものは何もないって…でもそうだなあ、きつと、君たち皆に歌やお芝居を辞めて欲しくない、っていう気持ちがあるかもしれない…

ヒバリ え！どうして？

パゴダ …僕は君たちと違って唄いたくても歌えなかったから…歌えない哀しさは…きつと君達よりよく知っているから…それに…

ヒバリ それに？

パゴダ 僕も泥の中に生きてままだ、埋もれた経験があるんだよ、今のこの町のようにね、泥に埋もれて、それでも生き延びようとして、這いずり回って…そして、そして…

ヒバリ …そうだ！パゴダ、あたし達の劇団に入んなよ！ アタシより歌も踊りも上手だし、アタシが座長さんに頼んだげる！

パゴダ いや、それは駄目、駄目だ。ムリだよ。

ヒバリ 大丈夫だよ！ ね！ きつと楽しいよ！

パゴダ そう…楽しいだろうね…でも、駄目なんだ。

ヒバリ どうしても？

パゴダ どうしても。

ヒバリ つまんないの、アタシみたいな下手っぴいなんかと違ってパゴダの方が向いてると思うんだけどなあ…アタシなんか、いつ辞めちゃうかって、いつも思ってるよ…自信

ないしなあ…

パゴダ (語気荒く) そんな、自分の事を下手っぴいなんて言うんじゃない！頑張らなきゃ…歌が唄えるんだ… 仲間が居て、唄う場所があつて…何を言ってるんだ！

ヒバリ (ビックリして) ……………！

パゴダ ごめん…

ヒバリ いいけど…、びっくりしたあ、だってパゴダって怒ると、しゃれんなんない位、怖い…

パゴダ ヒバリは下手っぴいじゃない。だったら君の前なんかには現れるものか…

ヒバリ 下手っぴいだよ…

パゴダ ヒバリ

ヒバリ なに？

パゴダ 歌を教えてあげる、僕の知ってる歌…

ヒバリ うん。

パゴダ 教えただげるから、それをずっと、覚えておいて欲しいんだ。

ヒバリ いいよ。

パゴダ 君だけに教えるから。忘れないで、約束

ヒバリ うん。

パゴダが唄う。ビルマの民謡か、日本の古代の恋歌。胸に染み渡る、アルカイックな力強い、メロディーと詞。もしくは、ビルマで独り死んでいく兵士の最後に見た風景。やがて、夜は更けていき、二人で唄い… (岩田は現在捜索中、三木さん、何かよいアイデアはありませんか？)

パゴダ (トイレに戻っていく) とってもきれいな声だ、ヒバリは下手っぴいじゃない…。じゃあ、明日、もう一度、また会おうね。

ヒバリ パゴダ！

パゴダ (立ち止まる)

ヒバリ パゴダ、ってどういう意味？ あなた本当は誰？

パゴダ 明日ね。(去る)

【第8場】稽古場。 三日目 最後の日

翌朝。全員が集まっている。朝から次の演目の稽古の風景である。病気になった子供の寝室。子供の枕元にはプリマの演じる子供の母。子供はツバメ。かなり、出来の悪い下手糞な歌と芝居。衣裳も芝居も皆、好き勝手にてんでバラバラ。プリマはグランドオペラ風。ツバメは貧乏長屋風。座長とポチはヤクザ映画風。プリモは歌舞伎調で勝手に芝居をする。作曲家は彼らの即興に必死に対応して四苦八苦している

母(プリマが演じる) どうしてこんな事になってしまったのー！ ああー、哀しいー、坊やが死んでしまう薬もない、食べるものもない、哀れな星の下に生まれ何の歓びも知らずこの世を去らねばならない我が子こんな時代にお前を生んだ母を許しておくれね、坊や

子供(ヒバリ) 母ちゃん、お腹がすいたよう

母 いっそ、死んでしまおう。このままこの子が苦しむだけなら哀れなこの子と道連れに

子供 母ちゃん、お腹がすいたよう

母 許しておくれ、可愛い坊や

ヤクザ(座長) こらあ、このクソアマ、ちょっと待ったらんかい！
わたらの借金踏み倒す気いかあ
そらあ都合が良すぎるでえ！

チンピラ(ボチ) ほんまや、ほんまや

母 まあ、私に向かってなんと無礼な言い草か

子供 母ちゃんお腹がすいたよう

ヤクザ じゃかましワイ！
生命保険もあれへんし
おのれが死んでもクソの役にも立つかいな
死んで借金踏み倒すんは
自分勝手も過ぎるんちゃうか

チンピラ ほんまや、ほんまや

子供 母ちゃんお腹がすいたよう

ヤクザ どうせ死ぬなら
身体で返してもらいまひよか！
その子もろとも、高く売れるでえ！

チンピラ ほんまや、ほんまや

子供 母ちゃんお腹がすいたよう

母 ああ、お助けを！

プリモ (ありえない、変な歌舞伎風の扮装で現れて異常なまでの高音とロングトーンで歌い上げる) お待ちなせーい！暫く！シバあらあーくう！

ヤクザ なんや、おのれは！

プリモ 弱きを助け、強気をくじく
この横暴を見捨てておけるものかあああー

と、自分勝手にいつ終わるとも知れぬ異様なカデンツァを延々と歌い上げる。他のメンバーはしらけて稽古は中断する

座長 やめろ！お前の独演会じゃない！

ポチ アー、疲れた、もう休憩にしようぜ

プリマ なにやってるの？ 大体その格好は何よ！

プリモ アタシはただ言われたとおりのものを着るだけよ！

プリマ (座長に) どういう事？

座長 これしかないんですよ…。

プリマ って言うか、これはどうよ！みんなてんでバラバラじゃない！

プリモ 仕方ありません、衣裳はあるものを着ていただかないと…

ポチ もういいよ、休憩にしようぜ、腹減ったよ。

プリモ アタシのは素敵よ… (気に入っている)

プリマ 第一この台本はどうよ！

座長 仕様がないうさ、衣裳がこれしかないんだから。台本を衣裳に合わせるしかないだろ。

プリマ 衣裳くらい新しくしてよ！

ヒバリ 無理です！ 今の私たちの予算でそんな贅沢は考えられません。それにケーリさんもいなくて…

プリマ もっとしっかりとした台本と曲を書いて頂戴！ 台本が予算に左右されるのは仕方ないけれど。曲はしっかりとしたものを書いてもらわないと!!!皆が好き勝手にアドリブを入れるんじゃないわ！

作曲家 (ボソリと)それって…僕に仰ってますか？

プリマ そうよ、しっかりして頂戴！

ポチ 本番はないわけだし、稽古のためだけじゃなあ…真剣に曲を書く気はしないってか？ あ、本番のもかけなかったんだっけ。

座長 あんまり作曲家を苛めるなよ、スランプなんだから！

作曲家 (見る見る顔が赤くなる) …

ポチ ねえ、お弁当は出ないの？

プリモ そんなお金があるわけないでしょ！

プリマ 喉が渴いたわ、お水は？

プリモ 表に水道があります。

プリマ ミネラルウォーターの炭酸入り!! 誰か買って来て！

ヒバリ あたし、行って来ます！

座長 ムリだよ、今開いてるコンビ二は車で20分はかかるぞ、お前運転できないだろ (ポチをチラリと見る)

ポチ やですよ、俺は…もうクタクタだよ 作曲家に行ってもらえよ。せめてそれくらいは役に立てよな！

プリマ 誰でもいいから早く買って来て!!!

プリモ わがまま言わないの！我慢しなさい！

プリマ ケーリがいたら、ちゃんと水くらい用意してたわよ！

プリモ アンタのせいであの子は辞めてったんでしょ！ 文句言わない！（と、自分だけ水筒の水を飲む）

ヒバリ あ！ずるい！

プリマ なによ、アナタ自分だけ…皆のぶんは!?

プリモ 知らないわよ。

プリマ ケーリだったら…

プリモ アタシはケーリじゃないわよ

座長 ちょっとくれよ。

プリモ イヤ、水は貴重品、欲しけりゃ自分で用意しなさい。

座長 そりゃないよ、冷房も無しで稽古してんだぜ！

ポチ 腹減った！ 死んじゃう！

プリモ 水なら、その池にでも飛び込めば！

ポチ やーめた！アー、もういいよ！、もう止めて、飯食いに行こう！

作曲家 ああ、うるさい！ 黙れ！ポケナスども!!!

一同、きよとん。

作曲家 皆、すき放題言いやがって…なにが冷房だ、なにがミネラルウォーターだ…？ そんなことのためにアンタ達は稽古場に来てんのか？ 畜生、それなのに僕は…僕は…

ポチ オ、おい、どうしたんだよ？

作曲家 触るな！ (と、飛び出す)

座長・ポチ お、おい！（と、作曲家のただならぬ様子に驚いて追いかける）

プリマ なに、一体どうしたの？

プリモ さあ？ 男のヒステリーかしら？

座長とポチの悲鳴が聞こえる。すると

作曲家 わあー！（と、駆け戻ってきて灯油らしきものを楽器とピアノの周りに撒く）

プリマ なにやってるの!!!!???

座長 (ポチと二人、駆け戻ってきて) 灯油だ！ 寺の倉庫にあったやつ！

ポチ こいつ、気が狂った！

作曲家 出てケ!! (手にライターを持つ)

全員 あーっ!!

作曲家 この稽古場は僕のものだ! この楽器たちは僕のものだ!! アンタ達はこの稽古場に
いる資格はない! アンタ達はこの楽器を触
る資格はない! アンタ達はいつもそうだ
…何が冷房だ! なにが衣装だ! 何がミネラ
ルウォーターだ!!
皆で我儘すき放題言っ、誰も真剣に舞台
をつくらうなんて思っ、ないだろ! 誰も
ちゃんと音楽をやろうと思っ、ないだろ!

座長 そんなことないぞ!

作曲家 公演しないで最後の三日間に稽古しようだ
と!? そんなのセンチメンタルな自己満足
だろ!

座長 それは…

作曲家 洪水が来て、町が大変なことになって、今
こそ音楽をやんなきゃいけないじゃないの
か! 今こそ、舞台を創んなきゃいけない
んだろ!
そうでなきゃ僕達が生きてる理由がないだ
ろ! 衣裳も道具も、劇場までなくなった
から頑張んなきゃいけないんだろ! それ
をなんだ!

座長 だからこうして皆で集まって…

作曲家 今の時代、今、この場所で、本当に人々に
聞こえなければならぬ響きはなんだ?
本当に人々に届けなければならぬメロ
ディーは何だ…、それを求めて、悩んで、
悩んで…。きっと、僕が本当に音楽の神様
に愛されているなら、僕が本当にこの稽古
場において、この楽器をふる資格があるな
ら、きっと、それを見つけることができる
…そう信じて、信じて…

座長 おい…

作曲家 でも…書けない…何を書いて良いか、判ら
ない…何も見つけられない…凄まじい現実
…もの凄い自然の力、今まで見たこともな
かった人の命のもろさ…巨大な悲しみに押
しつぶされる人の弱さ、惨めさ…今こそ、
今こそ、と思っ、もう自分の中から音
楽が沸いてこない…自分が音楽家であるこ
とが惨めですら思えてくる…何も聞こえな
い…凄まじい現実の前では僕の書くものが
ただただみすばらしく見える…書けない…
もう僕は…書きたくても、書けない…

プリマ アナタ…

作曲家 出てけ…

座長 おい、あのな…

作曲家 本当に火をつけるぞ。僕はこの楽器達もろ
とも心中するぞ!

全員 キャー! (悲鳴!)

プリマ 判った、出て行きます! 馬鹿な真似し
ちゃ駄目よ、いいわね!

ポチ (小声で) 独りにしたらマジでやべーよ

プリモ (小声で) いいから、みんな此処を出ましょ
う!

座長 (小声で) でも出てそれからどうする!

プリモ (小声で) 他にどうしようもないでしょう!?

ポチ (小声で) 本当に楽器を燃やされたらどう
すんだよ!!

作曲家 何をこそこそ喋ってる! 出てけ! (と、
ライターを…)

ヒバリ ごめんなさーい!! 出て行きマース!! (皆を
無理矢理引っ張っていきながら小声ですば
やく) アタシに考えがあります! トイレ
に! トイレに行きましょう!

座長 トイレ!!??

ポチ 判った! あいつだな!

作曲家 出てけええー!!!!

全員 キャー!!

全員、稽古場を出る 作曲家が取り残される

【第10場】 トイレ

ヒバリ達 comes. パゴダが座っている。

ヒバリ 居た! お願い! 助けて!

パゴダ 大変みたいだね

座長 だ、誰だ、こいつ。

ポチ いや、俺もよくは判らんんだけど…

ヒバリ 早く来て! 大広間、助けてくれるって
言ったでしょう!

パゴダ イヤ、僕は此処からは出られないんだよ

ヒバリ なに言ってるの? パゴダ!

プリモ パゴダ…! アナタ、パゴダ、って言うの?
(一瞬、背筋が凍るような風) …そんな、
まさか

ヒバリ (プリモの様子に少し驚いて) え?

プリモ アナタ、本当にパゴダなの? (と、パゴダ
に近付く)

ヒバリ (プリモを押しつけて) そんなことより、
ね、パゴダ、助けて!

ポチ 僕は此処からは出られないんだ、ヒバリ、

ヒバリ そんな悠長なこと! 楽器が、楽器が大変
なのよ! 稽古場も、稽古場まで燃え
ちゃったら、あたし達、もう…

パゴダ 楽器が?

ポチ ああ、灯油をぶっ掛けられたんだ！ キチガイが籠城してる！

ヒバリ 楽器はアタシ達の最後の財産なのよ！ あれが駄目になったらアタシ達おしまいよ！

座長 それに、寺に火でもついたら、これは大事だぞ…

ヒバリ 助けて！ 稽古場が燃えちゃう！ 稽古場と楽器はアタシ達の命なのよ！

パゴダ 楽器を助けないの？

ヒバリ え？

パゴダ 助けないのは楽器と稽古場？ じゃあ、作曲家は？

ヒバリ それは…

パゴダ 本当に助けないのは、助けなきゃならないのは、作曲家ですよね？
(トイレの戸口に立つプリマに向かって)
違いますか？

全員、息をのむ。押し黙ってしまう。誰も何も言えなくなってしまう。

パゴダ さあ、作曲家も、楽器も、稽古場も全部助けましょう！

ヒバリ どうやって？

パゴダ どうもこうも、アナタ達にできることをやるしかないでしょう？ アナタ達は医者でも大工でも政治家でもないでしょう？

ヒバリ でも

パゴダ さあ、ぐずぐずしない、申し訳ないが、どうやら時間がない。さあ、僕の周りを囲んでこうやって座ってください。

皆、押し黙ったまままるで子供のように素直にパゴダを囲んで円座を組む。

パゴダ さて、質問。この世界で一番最初にできた楽器、つまり一番古い楽器はなに？

ヒバリ 古い楽器？

パゴダ 座長さん？

座長 え？なんだ？太鼓か？

ポチ いや、草笛とかそういうのじゃねえか？

プリモ 馬鹿なこと言わないの。

プリマ 人間、そう言いたいよね？

パゴダ そう。(と、言って口笛を吹き、手を叩く)
貴方達の肉体こそ、全ての楽器の始まり、音楽のご先祖様。

手を叩き、足を打ち、拍子を取り始める、それはやがて、一つのリズムを刻み始める。

パゴダ さあ、アナタ達も一緒にやろう！
アナタ達の歌はここにいる僕のところまで聞こえていた。
此処で奏でる僕達の歌も聞こえるはずだ！
さあ、ヒバリ、

昨夜、ヒバリに教えたビルマの民謡。パゴダとヒバリに導かれ、一人、一人、参加していく。手を鳴らし、足を打ち、床を叩き、全員で唄う。心に染み入る、合唱になっていく。徐々に音楽は盛り上がり、劇団員達は音楽に没頭していく。

皆、夢中になっていく。
パゴダは皆と一緒に音楽ができて本当に幸せそうである。

やがて、音楽の盛り上がる中、誰にも気付かれず、そっと、パゴダが立ち上がり、去っていく。愛しそうに彼らを見つめながら、闇の中に消えていく。

パゴダ 時間が来た。
三日が過ぎた
もう一度、僕は闇の中へ帰っていく。
ヒバリ、君は下手っぴいじゃない。
さようなら、ヒバリ… (消える)

音楽は激しく盛り上がっている

ケーリ なにしてんの？ アタ達？ こんな所で？

全員 !!?

座長 ケーリ、お前…

ケーリ はい、これ(と、ペットボトルが沢山入った袋を置き、プリマに)ミネラルの炭酸入り。これじゃなきゃ駄目でしょ？ アタ達は自分勝手だから…

全員あわてて立ち上がり、駆け出す。ケーリはハそれをとめて

ケーリ チョ、ちょっと、どうしたの？

座長 稽古場、け、稽古場！

プリモ て、言うか、作曲家、楽器！ 楽器！

ケーリ 落ち着きなさいよ！ なに言ってるの？
作曲家がどうしたの？

ポチ だって、アノ、灯油を、気が狂って、

ケーリ ああ、灯油ね、拭いてたわよ。

全員 は？

ケーリ さっき、稽古場覗いたのよ。ビックリしたわ灯油臭くて！ そしたら作曲家がすいません、すいません…って泣きながら拭いてるじゃない。どうしたの、って訊いたら『すいません、こぼしちゃいました』だって。馬鹿、あの子。大事な楽器に何てことすん

だ、って思い切り引っ叩いといたわよ。

男達、稽古場に向かってダッシュ！ヒバリとケーリ、プリマが残る

ケーリ ちょっと、一体どうしたのよ！何があったの？

プリマ それより…アンタ、戻って来たの？

ケーリ いけませんか？

プリマ 懲りないわね。

ケーリ さあ（顔をそむけ、皆の後を追う）ちょっと、待って！

プリマ （ヒバリに）アナタ、いつの間にそんなに…知らなかった、アナタがそんなにいい声を持ってたなんて。驚いたわ。

ヒバリ いえ、あ、そうだ、パゴダ、パゴダは？

プリマ あの男の子ね？ どうしたのかしら？

ヒバリ パゴダ！ パゴダ！ 居ないみたい…。

プリマ さ、みんなの所に行きましょう。今日が最後の日。私たちの稽古場のね

ヒバリ はい…

プリマ お別れをしましょう、私たちの場所と…

二人は去る。ヒバリはパゴダを気にしている

【第11場】数日後 かつて稽古場のあった場所 更地

座長が居る。膝を抱えて町を見下ろしている。ヒバリが来る

座長 おう、早いな

ヒバリ 座長さんよ

座長 暇だからな、今はただの失業者だから。

ヒバリ 稽古場…何にも無くなっちゃいました…

座長 跡形もないな、此処で俺達が舞台を創ってたなんて嘘みたいだな。

ヒバリ 案外、狭かったんですね…。

座長 そんなモンだよ。いざ、取り壊すって言ったら、あつという間さ。

ヒバリ 創るのは、とっても時間がかかったのに…

座長 壊すのは、一瞬。…お、ケーリが来た。

ケーリ （手にはやっぱり、飲み物や食べ物がイッパイに入った袋）皆は？

座長 あんた偉いね、いつもそんなモン持ってきて。

ケーリ 一番近いコンビニが車で20分よ。途中で買いいに行こうって困るでしょ。今日は、特別、ハイ。（と、缶ビールを渡す）

座長 お、ビールか、気が利くなあ。

プリマがやってくる

座長・ヒバリ お早うございます！

ケーリ （ペットボトルを渡しながら）ハイ、アナタにはミネラル炭酸入り。

プリマ （ケーリに）あら、アナタ居たの？

ケーリ （それには取り合わず）ああ、此処からだと本当に町が一望ね。

ヒバリ こうして見ると、洪水、凄かったんですねえ。

ケーリ こんなちっぽけな町、一たまりもなかったんだわ。

プリマ アタシ達の本番もね、

ヒバリ 本当なら今日が…

ケーリ マ、作曲家が結局、曲をかけなかったから、やっぱり中止だったかも。

座長 おー！皆、来たな！

プリモ、ポチがやってくる

プリモ （周りを見回しながら）まあ、キレイさっぱりね。何にもないわ…

座長 久しぶりだな、皆元気そうさ。皆どうしてる？

ポチ 劇団がなきゃ、暇だよ、バイトしようにも、町がこれじゃバイトもない。貯金を食いつぶしてるよ。

プリモ アタシは学校が始まったから、結構忙しいわ。子供達は待ってくれないから、

ヒバリ そうか、プリモさんは音楽の先生なんだ！

プリモ いいえ、アタシはあくまで歌手よ、音楽教師は副職。

ポチ 今日は何に？ もう稽古場もなくなっただし、集まっても何にもできねえぜ

座長 昨日までで色々な整理がついたから、今日は報告だ。

ヒバリ まだ、作曲家さんがいらしてません。

座長 まず、それなんだ、話つてのは…作曲家なんだけど、奴は来ない。多分、もう、二度と俺達の前には…実は…

ポチ なんだよ

座長 失踪したそうだ。あの騒ぎの後、すぐに。

全員 …！

座長 家族にも連絡は無いそうだ…黙っているのもなんだし、報告しておくよ。

ヒバリ アタシ達のせいですよね…

ケーリ そんな事はないわ。

ヒバリ でも…

プリマ 作曲家のことはわかったわ。それで？

座長 楽器や、残った衣裳や道具類はご存知のとおり、倉庫を借りてしまってますが…。先日俺と家主さんが話をして、先方のご好意で次の稽古場が決まるまで無償でおいてくれるそうです。

ポチ この土地はどうなるの？

座長 市が買い上げるそうだ。その後どうなるかは全くわからん。暫くはこのまま更地だろうな。それと、此処からが一番大事な話だ…今回の公演の中止は止むを得ないということで業者の支払いや、チケットの払い戻しは最小限の出費で済んだ。これも色々な方の支援と、ケーリの努力のおかげです。

ケーリ でもね…

座長 ああ、それでも損失は膨大なんだ。とんでもない借金だけが俺達に残った…多分、今後、暫くは俺達の活動は…皆、判ってくれるな。

ヒバリ アタシ達はどうなるんですか？

全員 …。

ポチ どうなるのかなあ…

プリマ (立ち上がって) 皆、長い間、ご苦労様、有り難う。(ケーリに向かって) 貴方には感謝してるわ、本当よ。

ケーリ や、やめてください！

 気まずい沈黙が流れる

座長 ヒバリ

ヒバリ はい？

座長 あいつどうした？

ヒバリ あいつ？

座長 トイレに居た野郎だよ。

ヒバリ ああ、さあ、知りません。

座長 そうか…

ヒバリ バゴダが、何か？

座長 ！（と、プリモと顔をあわせる）

プリモ バゴダよ！

座長 そうか…

ヒバリ なんですか？

座長 ちょっと信じられん話だがな…（座長は腕を組んで黙りこくってしまう）

ヒバリ なんなんですか！ ねえ、プリモさん！

プリモ いいわ、アタシが話すわ。

座長 おい！

プリモ 黙っているのは良くないわ。だって、彼は最初にヒバリの前に現れたのよ。ヒバリは選ばれたのよ、この子には知る権利があるわ。

ポチ 何だよ、何のことだ。

座長 この寺のトイレの裏に小さな堂があったろ。

ポチ ああ、土砂崩れでペしゃんこになって泥の中に埋まっちゃったんだよな。

座長 今回の解体工事の途中でその堂の合ったところから小さな慰霊碑、というか像が出てきたんだ。

ケーリ 像？ 慰霊碑？

座長 それがなんだか誰も判らなかつた、俺達も知らなかつたし、誰も、それこそ、今度のことでプリモが気がつかなくなつたら誰も知らずに終わってしまっていたところなんだが…

プリモ アタシ…その話を聞いて町の図書館に行って古い資料を調べたの。そう。今では忘れられてしまっていたんだけど…もう何十年も前、日本がアジアの国を全部敵にまわして戦争を起こしたとき…この町からも大勢の若者が兵士として奪われていった。そして、南の国に送り込まれ、次々と志半ばで戦場で死んでいったわ。この町に生きて帰ってきたものは、殆ど居なかつたそうよ。彼らの骨はきっと今でも、南の国のジャングルの泥の中で眠ってるわ。

座長 この町に帰ってくるのできなかつた若者達の魂のために、この寺の亡くなった住職がこのトイレの裏に小さなお堂を建てて像を奉ったんだ。いわば…戦争に夢を、希望も、自分の才能も、未来も奪われた若者達の血を吐くような悲しい断念が、無念が…凝縮したものが、その像だったんだ…。

プリモ ヒバリ、その像はなんて呼ばれてたか知ってる？

ヒバリ いいえ…

プリモ バゴダよ。

全員 …!!
ヒバリ そんな!

沈黙。

ポチ 気、気味悪いな…
ケーリ 馬鹿馬鹿しい、何が言いたいんですか?
座長 何かの偶然か、悪戯かもしれない
プリモ 勿論、アタシだって、安っぽいドラマみたいな奇跡物語なんて信じないわ。
プリマ でも、あの子はパゴダと名乗っていたのよね。
座長 そうだ。
ヒバリ パゴダは…その像は…どうなったんですか?
プリモ 損壊が激しくて、もうバラバラになっていたから、残った部分はキッチンと供養されて、本山の大きなお寺に送られたわ。…そこで燃やされたそうよ。
ヒバリ 燃やされた!

ヒバリは顔を覆い、泣き始める。あまりの激しい泣きっぷりに、声をかけることも出来ず、皆立ちすくんでいる。

作曲家 (いつの間にか現れている) あの…
ポチ あ!!
ケーリ アナタ!
座長 作曲家じゃないか!
ポチ てめえ! 今頃ノコノコ現れやがって! どれだけ人に迷惑かけりゃいいと思ってんだ!
作曲家 す、すいません…
プリモ どうしてたのよ、第一その格好はなに? アナタ、かなり匂うわよ…
作曲家 皆さんに…その…今さら…申し訳ないんですが…
ケーリ なに?
作曲家 もう手遅れですが…その…曲を書きました…
座長 え!??
ケーリ 見せて!

作曲家の持っているぼろぼろの鞆をひったくる。中から楽譜が出てくる。全員で食い入るように読む

作曲家 …ともかく、メロディーが浮かんで、家にも帰らないで、ずっと書いてたんです…手遅れなのは判ってます、自分勝手だって言うことも、でも…でも

座長 (必死に読んでいたが、不意に顔をあげ) おい、曲ができたぞ…

プリモ そうね、
ポチ 放っておく手はないよな。
ケーリ お金はないわよ。衣裳も小道具もないわよ。
プリマ 要らないわ、
ケーリ 劇場も、稽古場もないわよ
座長 劇場…?

座長は辺りを見回す。皆もそれに倣う

座長 劇場は建てられなくても、歌は唄えるさ
ポチ やるか、ここで。
ケーリ 市役所の許可を取るのも大変ですよ、照明だってどうします?
プリモ 照明なら、…太陽も月もあるわ!
座長 大丈夫だ。唄いたい、という気持ちがある限り、俺達是可以する。何処でも唄える!
ケーリ 皆が皆、こんなにセンチメンタルだなんて知らなかったわ。

と、いいつつ、ケーリの顔は精気に満ちて嬉しそうで

プリマ ヒバリ
ヒバリ …(まだ泣いている)
プリマ さあ、いつまでも泣いてないの。あなたのお友達の、最後のあなたへの贈り物よ。(と、楽譜を渡す)
ヒバリ (楽譜をじっと見つめている)
プリマ 唄ってごらんさい!

ヒバリは歌いだす。最初はヴォカリーズで。全員が一人ずつ、それに唱和していく、全員が歌いだしたところで、ヒバリの口から歌詞が自然と出てくる。

ヒバリと全員 パゴダと人は彼を呼ぶ
古いお寺のお堂の中から この街を
何十年も眺めてきた
人の暮らしの嘆き哀しみ、おそれ、よろこび、
いのちの営み

そのたび人は僕に祈る
けれども僕は 此処から町を眺めるだけ
パゴダと人は彼を呼ぶ
遠い昔の戦のときに この街を
離れて戦ってきた
南の国の泥の中で、這いずり回り、
命を落とした
その時僕は 神に祈り
今では僕は 此処から町を眺めている

今こそ私は此処で唄う
砕けた町の瓦礫の上から この歌を
これからずっと唄い続ける
人の暮らしの嘆き悲しみ、おそれ、よろこ
び
今また私は立っている
今こそ私は此処で唄う
泥と瓦礫の世界の上で

幕